九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国における日本少女マンガの受容 : 矢沢あい『NANA』の読者を対象に

金, 慈恵
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494670

出版情報：比較社会文化研究. 23, pp.23-35, 2008-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第23号（2008）23～35
Social and Cultural Studies
No. 23（2008）, pp. 23～35

韓国における日本少女マンガの受容
－矢沢あい『NANA』の読者を対象に－

金（キム）　慈恵（ジャヘ）

はじめに

韓国には、日本の少女マンガに相当する、純情マンガというものがある。純情マンガは、長い間「女しかみないロマンチックなマンガ」としか認識されなかった。しかし、1980年代後半、韓国発の純情マンガ専門雑誌『ルネサンス』が創刊された直後から純情マンガは質的・量的両面において拡大していき、それに対する評価は劇的に改善された。このことは、1999年の『朝鮮日報』に「韓国のマンガの競争力は「純情マンガ」にある」と書かれたことをみても明らかである。

拡大した純情マンガは1990年代後半には研究対象として注目され始める。純情マンガは、ジャンルと受容者の相互関係が活発な媒体であり、歴史的に時代的状況と受容者の欲求によりジャンル慣習の変形を繰り返し発達してきた（パク2000）。カルチュラル・スタディーズのアプローチにより、テキストだけでなく受容者側の能動性が浮き彫りになるにつれ、純情マンガは読者と作家、ジャンルの相互関係が活発であることが注目され、ドラマやロマンス小説などと共に、テキストとその女性受容者が注目されたのだ。

しかし、こういった純情マンガの研究において注目されたのは「韓国の」純情マンガの受容に限られており、日本少女マンガの受容について語られることはほとんど無かった。これは不思議なことである。なぜなら、韓国では、韓国で創作された純情マンガと共に日本の少女マンガもまた「純情マンガ」として読まれているからである。また、純情マンガを含む韓国のマンガ自体、その導入直後から大衆文化として定着するまでに日本の影響を強く受けており、現在も絵柄やストーリー構成に至るまで日本マンガの影響を見ることができるということ、そして、審議や検閲など外部からの抑圧によりジャンルが滞っていた際には、日本の少女マンガが韓国の純情マンガに新しい刺激を与えジャンルの発展に助力してきたということも忘れてはならない。

では、なぜ韓国で消費されている純情マンガの一部分であるはずの、日本の少女マンガの受容については語られないのだろうか。日本の少女マンガは「日本」に属するものであって、韓国の受容者とは相互関係が結べず、韓国読者の欲求を描き出せていない（ノ2000：70-78）からだろうか。

本稿では、近年日本で大衆的なヒットを果たした日本の少女マンガである矢沢あいの『NANA』が、韓国というコンテクストにおいてどのように受容されているのか、何が受容されているのかについて明らかにする。また、韓国読者の日本少女マンガの受容について検証することにより、現在韓国における純情マンガをめぐる状況と、純情マンガに対する新たな需要について考察したい。

1．研究方法

本論文が目的としている韓国読者の『NANA』の受容形態をみるためには、読者がどのようにそれに接し、なぜそのテキストを読み、またその中の特定の人物についてどのように考えているかなどについて把握する必要があるだろう。そのためには、量的調査よりは質的調査が必要だと思われる。

今回の調査は、2005年８月から10月にかけて、慶熙大学のマンガサークルの会員数名、知人の紹介による『NANA』のファン、ブログなどで『NANA』を取り上げていたファン、また韓国のポータルサイトである「daum」に属するコミュニティサイトのひとつで、矢沢あいのファン・コミュニティサイトである「HAPPY　BERRY」の会員など、『NANA』の読者総勢100人を対象として行った。被調査者の年齢の分布は、大学生以上が９人、大学生が36人、高校生が37人、中学生が18人であり、学生が多く見られた。ここで、現在韓国で主に純情マンガを消費しているのが小・中・高生であることを考慮すると（クァク2000）、今回の被調査者の年齢分布は少々高めと感じられるかもしれない。しかし、後ほど『NANA』から読者が受容するものの特徴を明らかにすることで、今回の被調査者年齢分布が『NANA』を論じるにおいて妥当であるということも明らかになるだろう。

多くのアンケートはファン・コミュニティサイト「HAPPY BERRY」の掲示板に掲示したアンケートへの自主的参加によるものだったが、ファン・コミュニティサ

イト内で積極的に意見を交わしているのは女性が多く、そのため、男性の意見を取り込むことが難しかった。

2．『NANA』の受容者の特徴

では、『NANA』について積極的に意見を交わしていた女性たちは、どのような女性たちなのだろうか。『NANA』は、2005年当時日本において13巻までの累計販売部数が3200万部を越しており、主な読者である若い女性たちへの認知度はほぼ100％の近かったという。しかし、韓国で『NANA』の人気はそれほど「大衆的」ではない。それは、まず『NANA』という作品以前に、マンガを読み、またその中でも純情マンガ＝少女マンガを読んでいる人の割合自体が日本より少ないということが理由としてあるのだが。しかし、それと同時に、『NANA』の読者自身が「自分が『NANA』を読んでいること」を一般的な行動と位置づけていないという事実がある。こういった自分を「ファン」と位置づける認識は、『NANA』という作品自体に対して持っているイメージや、『NANA』を読むために行う自分の行動と関係がある。

2－1．『NANA』を見るための積極的な行動

まずは、「日本の少女マンガである『NANA』を読む」という行動について。メンは韓国における日本大衆音楽の消費において、日本では当たり前と考えられている、メジャーとしての「大衆音楽」という考え方を、韓国においても適応させることは難しいと言った。日本で大量に生産され消費されるものだとしても、それが韓国においてもそうであるというわけではないのだ（メン2000：1）。それは、当時日本の大衆文化が規制され、その消費の手段が不法であり、今ほど自由に接することができなかったという時代的背景のためであったのだが。もちろん現在、韓国において日本大衆文化は開放され、日本のマンガに接することはそれ以前ほど難しくはない。しかし、海賊版ではなく、正式な契約を交したライセンス版のコミックスを社会的な許可のもと消費できる現在においても、日本でそれを消費することと、韓国でそれを消費することはやはり異なっているだろう。

その違いは、『NANA』を積極的に消費している読者の行動に現れる。矢沢あいのファン・コミュニティサイト「HAPPY BERRY」の会員たちは、その多くが作者や作品についての情報をインターネットで検索しているうち、このサイトを見つけ会員になったという。コミュニティサイト内では、矢沢あいの以前の作品からファンであった人や、『NANA』を読みファンになった人たちが、互いが持っている情報や意見の交換を積極的に行っている。また、このサイトの会員でなくても、『NANA』のファンたちはそのサイトの存在を知っており、やはり情報を検索しながら知ったという。このような「情報を探し求めての行動」だけなら、日本の『NANA』ファンも同様であろう。しかし、韓国のファンには、意見交換以外に「作品を見るため」の行動が現れている。

日本で単行本が発行されてから韓国で翻訳版が発行されるまでに通常２ヶ月ほどがかかる[1]。韓国のファンは、日本ではすでに発売されていることを知っていながら、韓国でコミックスが発売されるのを今か今かと待ち焦がれているのである。ここで、多くの読者は、正式的に契約を交した翻訳版が韓国で発行されまで待っているのだが、それを待ちきれない一部のファンたちは、直接日本から雑誌（『Cookie』）や『NANA』の単行本を取り寄せる。しかし、これは語学能力と金銭的な余裕があるもののみが行う行動であり（たまに、日本語はできないが、日本語のコミックスを取り寄せる人もいるが）、大抵はインターネットを活用する。

私がアンケートを行った矢沢あいのファン・コミュニティサイトの「HAPPY BERRY」には、ファンが『NANA』の内容を様々なかたちで公開していた。例えば、当時日本で発売されて間もない『NANA』13巻を読んだファンが内容を細かに説明したり、また、雑誌で連載された１話ごとに、スキャンされたマンガがアップロードされたりもする（これは著作権違法なのだが）。スキャンされ掲示されたものは、日本の雑誌に連載された日本語版のものや、また中国語版のものもある。このような、アップロードされた外国語版の『NANA』を、また別のファンがみんなが読めるよう翻訳し、また別のファンがそれを見やすいように編集してアップロードし直す。一連の行動にかかわっていないファンたちは、アップロードされたものを読みながら掲示板のBBSに感謝の言葉を残し、その過程でコミュニケーションが行われる。このように、発行された本を読むというだけでなく、「読むため」の積極的な行動は、韓国で『NANA』を読むファンの特徴と言えるだろう。

2－2．ファンという自覚

そして、もうひとつ、『NANA』のファンの特徴として、『NANA』という作品を読んでいる自分を認識していることがある。前述したように、韓国では『NANA』という作品自体「大衆的な作品」と捉えられていない。日本では「多くの若者から共感を集めた」と形容されていたのだが、韓

1　『NANA』はもともと、『Zooty』（ハクサン文化社）という韓国の純情マンガ雑誌で連載され、作品を消費するにあたって日本との時間差はほとんど見られなかった。しかし、この雑誌は1年ほどで廃刊し、現在韓国で『NANA』は単行本のかたちで発行されている。

国ではそれが題材としているものがロックバンドであることや、独特のファッション、またその中に描かれる「リアル」な内容が容易に接しがたい理由となり、マンガを読みなれていない読者を遠ざけていた。

「韓国では、(知名度が)そこまでではないと思います。大衆的に知られているとは言いがたい。マニア層はいるけど。(中略)バンドものを扱っているということで、それと関係のある人の関心を集めたということもあるし。やっぱり「マニア的要素」が作用しているかも。ファッションもそう。パラキスもそうだけど、ご近所も日本的でビジュアルの入ったファッション。(ユ・ヨノク／20代大学生／インタビュー)」

「『NANA』の場合、題材自体が韓国では大衆化していないと思う。音楽というのもそうだけど、そのなかでもバラードとかじゃなくて、パンクスタイルだし。(中略)だから、もしこのマンガが音楽の中でもアイドルものとかを題材に選んでいたら、韓国でもより大衆受けして、商業化したマンガになっていたかもしれないかな…。それと、韓国はマンガを読む年齢層というのがもっと低いと思います。だから、『NANA』に出てくる性生活とかを、受け入れ切れないというか、理解できないというのがありますね。(パク・ヘジン／30代／インタビュー)」

「日本で普通の少女マンガとして受け入れられるかもしれないけど、韓国では『NANA』は内容的にも、まだすごく挑戦的なもの。韓国でこれは「マニア」のものでしょうね。(中略)　日本では大衆的な素材の内容かもしれないけど、韓国ではまだそれほど親しまれないかも知れない素材だと思う。(イ・ジョンフン／20代男／インタビュー)」

しかし、『NANA』のファンである読者は、そのような部分こそが『NANA』の魅力と感じていた。つまり、今まであまり扱われていなかった音楽という題材や、矢沢あい独特のファッション、そして一番に、今までのありふれた「純情マンガ」というイメージから離れた「リアルさ」を『NANA』の魅力と感じていたのだ。このように、『NANA』のファンは、マニアとまではいかないまでも、自分がある程度マンガ(韓国のもの、日本のものに関わらず)を読み込んでいると認識しており、その上で、「既存の純情マンガとは違う『NANA』」に興味をもっているのだと自分を位置づけていた。

3.『NANA』受容者の既存の純情マンガに対しての認識

ここで、『NANA』の内容への受容様相についての分析に先駆けて、『NANA』のファンである読者が既存の純情マンガをどのように受け止めているかについて明らかにしておきたい。アンケートと、インタビューを通し『NANA』が既存の純情マンガとどこが違うのかについて質問したところ、被調査者がイメージしている「既存の純情マンガ」は、共通した特徴を見せていることが明らかになった。

読者の持つ「既存の純情マンガ」に対するイメージは、大きく二つに分けることができる。一つ目は、ロマンスプロットを中心に据えるものということ。つまり、「既存の純情マンガ」は恋愛ごとを主なテーマとして扱っていることが多く、それ以外の仕事、夢などについては描かれていないことが多いと感じており、その点に不満を表していた。二つ目は、キャラクターの設定とナラティヴの展開の定型性である。彼女たちが指摘した定型性とは、1970年代『キャンディ・キャンディ』が韓国の純情マンガに影響を与えた以後、定着した純情マンガの典型的な特徴であった。その、「誰にも愛される」「ちょっと抜けている」女性主人公に、「女性主人公だけを愛する」「二人ないし多数の」「お金持ちでかっこいい」男性登場人物たちというキャラクターの設定は、少々形を変えながらも、今もなお純情マンガの王道として繰り返されている。また、「すべての男性登場人物が主人公女性に思いを寄せ、二人ないし多数の男性のなかの一人と結ばれハッピーエンドになる」という展開についても読者は、「ありきたり」で「似たような展開」であると感じることが多く、その新鮮味のなさを指摘している。

「純情マンガってストーリーが荒唐無稽というか。多数の美男子が、ぼ〜っとした、取り柄もない女の子を同時に好きになるとか、不良でかっこいい男と、優等生でハンサムな男が一人の女の子を好きになるとか。総合したら、ありきたりな多角関係の恋愛物語なんですよね。ありえないって。ユ・ヨノク／20代大学生／インタビュー)」

「すべては学園もの？　韓国では大人はマンガはあまり読まないからかも知れないけど、学園生活での恋愛ものしかないみたい(dayan／20代／アンケート)」

つまり、彼女たちは今まで読んできた「純情マンガ」の中には固定化された枠があると感じており、そのジャンルに新鮮味を見出すことができなくなっているという。

4．『NANA』の受容　―読者が受容しているもの

読者は既存の純情マンガに表れるロマンスプロット、定型化したキャラクター、そして定型化した展開に不満を表していた。それに対して、『NANA』については、「既存の純情マンガのイメージ」とは相反する、さまざまな魅力について物語っている。ここで語られる部分は、現在読者がこれまで「純情マンガ」で得ることができなかったことであり、「純情マンガ」に求めている部分であるのではないだろうか。

では、読者は『NANA』のどのような部分に魅力を感じ、『NANA』のどのような部分について語っているのか。調査の結果、読者が「『NANA』の魅力」について、共通して「リアルさ」に共感しており、「かっこよさ」にあこがれていると語っていた。ここでは、「リアルさ」「かっこよさ」二つの点に焦点を当て、韓国の読者が『NANA』から「何」を受容しているのかについて検証したい。また、そうすることにより、読者が現在の「純情マンガ」に求めているものも導き出したい。

4－1．リアルさ

先ほど、読者が『NANA』を語る際、「リアル」という単語を用いると述べた。フィクションであることを前提としたマンガの中で、「リアルさ」はどのように現れるのだろうか。

> 「絶対にこんなことないだろうなぁという部分と、自分のまわりにも起こるかもしれないという現実的な側面が感じられたからヒットしたんだと思う。」
>
> 「 私達の日常で起こりうることと、私達の世代が憧れているフィクションを混ぜ、それが適切にミックスされてあるから、みんながここまで熱狂するんじゃないかな？」

上記の二つの発言は、前者が日本のドラマ『ロングバケーション』に対する感想であり、後者は『NANA』に対する読者の感想である。伊藤守は、現代のドラマに対して、このような感想が多く見られたと言っていたのだが、それは『NANA』についての感想も同様であった。この二つの発言には、現代のドラマやマンガのリアリティと、非リアリティの錯綜した関係が綴られている。つまり、伊藤が言うように、その世界が「虚構の世界」であることを十分に理解していながらも、もしかすると「自分のまわりにも起こるかもしれない」リアルな世界として感受されているのだ。

伊藤守は、視聴者が現代のテレビドラマにおいてリアリティを感じることは、ドラマを「非リアルな世界」や「虚構の世界」であることとして現実から切り離して消費するのでなく、「自分」をその空間の中に投影し、現実の自分やその周りの世界を理解し解釈していく参照点とみなすことが可能な、そのような意味で「リアル」な世界として受け止めていることだと言った(伊藤1999：87)。それは、マンガにおいて読者が感じる「リアルさ」も同様であろう。彼が言うテレビの視聴者のように、マンガの読者たちも、家族や仲間との関係が織りなす現実世界だけでなく、テレビやマンガが創り出す情報世界の中に住んでいるといったほうがいいくらいに、その「リアル」な世界に引き込まれているのだ。

4－1－1．　キャラクターに現れるリアルさ
：新しい人物像の提示

現実の不安を共にする主人公小松奈々―アイデンティティの不安定さ

『NANA』の作品の中には、さまざまな性格をもった、多数のキャラクターが登場する。読者たちはその中でも、「ナナ」という名前を持つ二人の主人公、小松奈々と大崎ナナに多く共感を表していた。特にハチこと小松奈々には、そのダメさ加減に自分を重ね、共感していた。

> 「他人に依存することが好きで、いつも愛を渇望しているところ、そしてやさしいのに弱いところが私とそっくり。(sweetberry／高校性／インタビュー)」
>
> 「二重的な面が好きかな。正直で明るい子だけど、すごく暗くなることもある。感情の流れが激しい。わがまま自分勝手だが、嫌うことができない。淳子のような気持ちかな？ほっとくことができない。一番現実的なキャラクターではないかと思う。(pure143／20代／アンケート)」
>
> 「ハチはとても愛らしい。性格が私と似ている。男がいなかったら生きていけないところとかも、そしてそれでも女友達も軽く思わず、むしろ男より大切に考えるところとかが同じだ。(is0314／20代／アンケート)」
>
> 「いままであったのと何か違う！主人公自信も自分の傾向を理解してますよね？自分の弱さを最初から見せているというか。もともと、マンガの主人公は、ほとんど神様で、すごくいい子なのに。この子は、そこまで「いい子」ではないし。(パク・ヘジン／30代／インタビュー)」

読者は、小松奈々を、「他人に依存」したり「愛を渇望」したり、「男がいなかったら生きていけない」、明るいけど、

暗い部分を持つ「二重的」な性格と表現し、「かわいい」部分とともに、そのような小松奈々の「ダメさ」の部分にも共感している。小松奈々は「いい子」ではないのだ。クァクは、純情マンガの受容者は、自分と重なるところ（重ねられるところ）があったり、実際の自分の経験と似たような内容を見せるマンガに注目し、主人公に共感しながらマンガのストーリーに感情移入をするという。そのため、典型的な純情マンガに表れる「善良で心やさしく、誰にも好かれるという主人公は、現在の読者には好意的に受け止められていない。自分と違いすぎる距離感から、共感できないというのだ（クァク2000：20－24)。

「小松奈々と私は似ている、同じだ」という、小松奈々への自己同一化は、奈々が「ダメさ」や「二重性」を持っている不完全な人物であるということにより可能になる。そして同時に、「ダメさ」や「二重性」を持つがための不安定なアイデンティティはそれを深める。つまり、どうしようもなく流される姿や、解決のできないまま悩んでいる自分を、奈々を通してみつめ、より深く同一化していくのだ。次は、読者の選んだ印象深かったモノローグである。

「東京に出て来さえすれば／欲しい物が何でも手に入る気がしてたけど／だけどこの手につかんでいるという実感があまりないや／なんでだろう／だいたいあたしの欲しい物っていったいなんだろう／障司との時間／かわいい服や雑貨／おしゃれな家具と部屋／どれも大事だけど何かものたりない（『NANA―ナナ―』２巻：160－161)」

「あたしいったい何が欲しいんだろう／こんな流されてばかりじゃ何も摑めない。(『NANA―ナナ―』6巻：135)」

「まだ足りないの？／どれだけ沢山ほしいものを浮かべても／ここから立ち上がる気力さえ湧いてこない／たったひとつでいいのに／夢中になって走り出せるものが／あたしにもあればいいのに（６巻)」

近代社会以後、伝統社会に比べて規律が少なく、多くにおいて自由なことが多い。しかし、だからこそすべてを自ら決めていかなければならなく、自由と同時に常に「不安」を抱えているだろう。ハチのダメさ加減が現実の自分の経験とつながり、ハチを通して現代に生きる自分の「不安」を投影しているのではないか。

小松奈々は、確かにフィクションの世界のキャラクターであるが、純情マンガという固定された枠の中で定まっている人物ではなく、自分の行動について、欲望について、夢について、またその時々起こったことについて絶えず問い直している。ギデンスは、近代社会を反省性(reflexivity)の徹底化によって特徴づけている。反省性とは、自分自身のあり方について絶えず問い直し、相対化し、修正し、時には別の選択肢に乗り換え、更新していく営みのことである。そして、ポストモダン社会では、この反省性が社会全域に深く広く浸透し、それまでの自明な前提をことごとく解体して行く。また、反省性は同時に自己の核心部分にまで及んでくる。自分は何者であるのか、自分の人生はどのようにあるべきなのか、そのためにはどうすればいいのかと、絶えず問いを繰り返すのだ（ギデンス2005：32－33)。

「ちょっとわがままで失敗だらけなところを見て、またそれで傷ついたり、いろんなことを考えていることを見て、私もハチを通し自分について色々考えたりします。(イム・ダヘ／20代／アンケート)」

「ハチを見ていると、私のどこかに隠れている不足している部分を発見することができます。(ジョージを夢見て／アンケート)」

「私も、そう。なんというか、そんなことない！と知らんふりして隠している私の一部がハチを通して顕になっているというか。それが正直すごく恥ずかしいけど、でも自覚してその部分を見つめることができたというか。ハチを見て…（ラズベリーパイ／アンケート)」

小松奈々は、自分を問い直す過程で必ずしも答えが見つかるわけではなく、また小松奈々が物語の中で必ずしも成長するわけではない。しかし、読者は小松奈々が、絶えず自分を振り返り、問い返すことに接することにより、一度自分について問い返す機会を得る。ウォンは、純情マンガは相互テキスト性が高いと主張した。作家の経験は登場人物の経験として、そして登場人物の経験は読者の経験へと転移し相互作用しながら、読者がもう一度自分を考えなおす時間を与え、読者（女性の主体）を変化させるというのだ(ウォン2000：16－58)。つまり、マンガのキャラクターの一人である小松奈々に共感することを通して自身の思考や経験を省み、「自分」という主体を新しく構成する機会を与えられるのだ。

『NANA』に登場するキャラクターたちは、既存の純情マンガのように固定化され、類型化された存在ではなく、みなどこかに弱さを潜めている不安定な人物として描かれている。特に、物語の中心となる二つのバンド、ブラストとトラネスのメンバーは、作品のなかで直接自分について語らないにしても、それぞれの物語を持ち、それぞれの考えを持っていると匂わせている。矢沢あいはこの作品を作る際、意識的に多様な背景を持つ多様な人物を登場させ、読者がその中の誰か一人にでも共感することができたらと語っていた（香山2003：127)。自分は何者であるのか、自

分の人生はどのようにあるべきなのか、そのためにはどうすればいいのかという現代に生きる人の漠然とした不安を、様々な人物を通して映し出し、読者はそこに自分の不安を投影し共感しているのではないか。

地に付いた代理満足を与える：大崎ナナ

多様な登場人物への共感は、「ダメさ」が目立つ小松奈々だけでなく「かっこいい」、「あこがれの対象」である大崎ナナへのものも伺える。ここで、大崎ナナを強く自己同一視していた一人のファンを紹介してみたい。

> 「共感…一言でナナ（大崎ナナ）は私にとってそういう存在ですえね。（中略）なんか、誰かが私の心を持ち代わりに生きてくれているような気分です。私が先にナナのような心を持ち、後で出会ったのか、ナナを読みながらその様になったのか…私が先だったか、ナナが先だったか。自分の自我を疑いそう。(Dirty　Angel／20代／インタビュー)」
>
> 「大好きなレンのそばにいても満たされない。大好きな音楽をやっていてもやっぱりそう。ハチにもし自分達が恋人で、抱き合えたら満たされたかな？といっていたときは本当に…　でも、それでもナナは満たされないでしょうね。私がそうであるように…。」

この読者は、両親との不仲、音楽への夢という自分の背景を大崎ナナに重ね、『NANA』の中に描かれている大崎ナナをめぐるすべてにおいて自己投影しながら読んでいた。しかし、同時に自分の境遇とは異なっているナナにうらやましさを感じていることが伺える。例えば、大崎ナナの小松奈々への執着心や独占欲といった感情に共感をしながらも、小松奈々のような反応を見せてくれない自分の友達には寂しさを感じ、小松奈々という友達を持ったナナにうらやましさを感じる。

> 「ナナがハチを所有したかったように、私もそんな友達がいます。（中略）ナナとハチの友情…？？というか、執着？というか…この部分への感情…に対する共感かな？（中略）私は、その友達でなくてはダメなのに、その子は私でなくてもいいみたいです。ちょっと寂しいですね。」

ここで「うらやまさしさ」の部分は、ナナを取り巻く周辺にも向けられている。

> 「このごろ、ナナにはうらやましいことばかりです。（中略）ブラストという友達がいてくれることに。」
>
> 「11巻に〈こんな軟弱な私がきらいなの。こんな自分にはもうたいがい付き合いきれないのに、なんでこいつら懲りずに一緒にいてくれるんだろう。根性あるな〉というセリフがありました。私も私自身に嫌気がさすことがあります。で、久しぶりに友達たちに会って、互いについて話していたんですが。その時自分自身も腐っていて、すごく意地悪な気持ちになっていたんです。でも、それでもこの友達たちは私を離れないだろうという確信がほしくて、また、病んでいたんでしょうね。で、友達に質問したんです。私が卑劣で、悲惨で、醜悪な姿の時も私を温かく迎えてくれるそんな友達がいたらいいな～って。そしたら、そんな 卑劣で、悲惨で、醜悪な子のそばにいたいひとなんて、どこにいるのって。もし、そうなったとしたら自分は当分会わないわよって。冗談で言っていたけど、私は本当に悲しくて、ナナをうらやましがりながら泣きました。」
>
> 「ブラストは私にとって世界のようなものです。（中略）友達といても、寂しさだけがどんどん募るだけで。そこで、得ることができなかったのを…『NANA』の中で感じています。（中略）本当は、そういうのも友達関係の間で感じたかったんですけどね。」

彼女は、自分のきらいな部分を受け入れてくれなかった友達に対して感じた寂しさを、同様の弱点を持つ大崎ナナを、ナナの友達が受け止めてくれることにより寂しさを解消させていた。これは、現実の経験では得ることのできなかった感情を『NANA』の中で得ているといえるだろう。つまり、彼女はナナと自分の境遇を重ね、ナナの行動と心情に共感しながらも、自分とは異なった状況にいるナナを通して代理満足を得ていた。それは、他の読者たちも同様であり、小松奈々とはまた別に、憧れの部分と満たされないという二重性を持つ大崎ナナに「同じように共感できる部分と、反対に満たされる部分がある。(vgusrud-_-／中2／インタビュー)」のである。読者達は、「かっこいい」部分への憧れとともに、自分と重ねられる部分への共感が合わさり、自己同一化と地に付いた代理満足を同時に感じていた。

このような代理満足は、既存の大衆小説的なマンガが与えてくれた「波乱万丈生き方」を通しての代理満足とは異なっており、読者の身近な状況、つまり自分が生きている

日常でも起こりうることとしての、リアリティを伴った代理満足であるだろう。

4－1－2．既存の純情マンガの「枠」を越えた関係性

韓国で、ドラマや映画などが「純情マンガのような」と形容される場合、それは「ありえない、夢物語」という意味で使われることが多い。それは、「純情マンガ」を、1980年代韓国純情マンガの独自的な世界を築く以前の、「実際ありえそうにない物語から代理満足を得ていた「大衆小説的」なもの」としてしか認識していないからであろう。

もちろん、現在そういった代理満足を追及する作品がなくなったとはいえない。しかし、キャラクターとして新しい人物像が提示されそれが共感を集めているように、その展開においても新しい展開が要求されているだろう。では、新しい展開とはどのようなものだろうか。

変化する男女の関係

純情マンガでもっとも典型的といわれている部分は、主人公を中心とした男女の関係、つまり恋愛関係におけるロマンスの描かれ方にあるだろう。「ロマンス」とは、〈①恋物語。恋愛譚。また、恋愛事件。ローマンス。②中世スペイン期限の物語的・抒情的な定型詩、およびその歌曲。〉であり、また「ロマンチック」とは〈①伝奇的。空想的。浪漫的。②雰囲気などの甘美なさま。〉である（広辞苑）。純情マンガの典型は、ロマンスにおいての①と、ロマンチックにおいての①②の部分を有するだろう。

被調査者に『NANA』と既存の純情マンガとの違いとは何かについて質問したところ、「男女の関係の描かれ方」という意見が最も多かった。（次に「リアルさ」、「女性の友情中心に描いたところ」などがつづく）そして、読者が記述した『NANA』に現れる「男女の関係」を大きくまとめたところ、それは「ロマンス」の終焉、つまり「夢物語」「ロマンチックな物語」としての純情マンガの特徴の二つ「誰にも愛される主人公」と「永遠の愛」の終焉であった。

> 「既存の純情マンガと違う点は、かわいくない子で、愛される要素は明るい性格しかなさそうな子なのに、無理やり繰り広げられる三角、多角関係ではなく、本当に好きにならずにはいられなかったんだろうな…という感じがあるところ。無理がないというか。自分でうなずけるような、納得できるような状況が伴われている。障司が幸子を選ぶときも、裏切られた感はあったけど、…幸子も憎たらしかったけど理解はできたし。そういった面はリアルかな～。(ppippi1019／20代／アンケート)」

つまり、『NANA』の作品の中での出来事を「虚構の世界」での出来事として扱うのではなく、その基盤を自分のいる現実に置き換えた上で、それがありえるかを判断していることが伺える。男性登場人物は「主人公であるから」好きになるのではなく、そのキャラクターがどんな人物であっても、「好きにならずにはいられない特徴」を持っているから好きになるのだ。そのことを、最もはっきり見せているのが「幸子」の存在であろう。安部和重は、幸子を 単に計算高いだけでなく恋敵として叶わないものをもっている、男を横取りしていく女性の最終形といった（森2005：40－45)。それほどの魅力をもっている女性に惚れたのなら納得がいくだろう。例えそれが主人公の彼氏であっても。

そして、そのような関係であるからこそ、「永遠の愛」はありえない。

> 「大部分のマンガは、ひとつの愛について扱っている物語じゃないですか。例えば、一目惚れで、周囲の反対を押し切って！…みたいな。でも、ハチ（の相手）は一人じゃない。そんなハチは浮気性といわれるかも知れないけど、〈別れと出会いの繰り返し〉という点は現実的だと思う（ファン・ユリン／20代／インタビュー)」
>
> 「 現実では、人が生まれてから、一人だけをずっと思うことなんて難しくて、それは稀なことだと思います。ここ（『NANA』）では、主人公もそれ以外の登場人物も、マンガの中の人物というよりは、現実に存在する人みたいに誰かを愛して、別れて、ということが描かれているところが良い^^（lunasugi／20代／インタビュー)」

『NANA』の中に表れる男女の恋愛関係は、既存の純情マンガの「決まった何人かのうち、最終的に一人を選択する」という「枠」を越えた。もちろん、マンガという媒体の閉じられた空間の中でそれに限りはあるが、小松奈々は自分の周辺の人物たち、結婚しているサラリーマンの浅田さんであったり、友達の親友であった障司であったり、またブラストの会員であるノブや、憧れのミュージックスタータクミなどを好きになっていた。そのような、小松奈々の好きになる人は、例えば同じバンド、ブラストのヤスであったり、トラネスのレンであっても構わなかった。そうでなかったのは、小松奈々という「人物」の好きになる条件に合わなかっただけなのだ。

ファン・コミュニティサイト「HAPPY BERRY」の掲

示板を見ると、「小松奈々は誰とつき会うのでしょうか？」また、「ノブとユリはどうなっているの？」などという問いかけを多く見つけることができる。読者達は繰り返される「ロマンスプロット」には飽きていながらも、その関心の中心にはやはり恋愛ごとを発見することができる。しかし、それはただ単純に「誰が誰と」ということでなく、さまざまな選択が有りえるからこそ、どんな状況で、なぜその人を選択するのかというように、読者の疑問が深まる。したがって読者は、小松奈々がどの男性と恋愛関係を築いていくか予想できず、その展開に期待し次の展開を見守る。ありきたりの展開は「永遠の愛」の終焉により新鮮で予測のつかないものへと変化し、読者の興味を引く。

恋愛関係以外の関係 ― 女性の友情

さて、ここで、純情マンガのロマンスの中に現れていた「ロマンチック・ラブ」について見てみよう。ギデンスの概念であるロマンチック・ラブとは、二人の男女が自立的に愛情を感じ、結局は結ばれるというものだ。現在は当たり前とも思えるかもしれないが、ギデンスは「ロマンチック・ラブ」とは、近代の始まりとともに現れた、歴史的に特殊な愛情の形態であるという。個人が自発的に愛情を感じ、関係を発展させ、結婚にいたるというロマンチック・ラブの概念は、愛情・結婚・性という3つを密接に関連させることにより、「恋愛結婚」という文化的形態を創り上げたのだ（ギデンス1995：32）。

ロマンチック・ラブは、そこに現れる関係性が外部社会の基準よりも二人の感情的没頭に由来することから、平等主義的傾向を有する。それはまた自由や自己実現と結びつき、理想的な形として「ロマンス」の中に描かれている（ギデンス1995：67-76）。純情マンガで描かれているのはこのようなロマンチック・ラブの「理想」であり、読者はそれを「関係性のモデル」として受容してきた。

しかし、愛情を育むことはもっぱら女性の任務のようになり、ロマンチック・ラブに関するさまざまな理念は、女性の家庭における従属状態と、さらに外部世界からの相対的隔離をもたらした。現実的にそれは権力により歪曲されることが多く、実際ロマンチック・ラブが再生産するものが、対等であり民主的であることは難しい。

既存の純情マンガでは、恋愛の最終段階としてのセックスや結婚が描かれており（韓国の純情マンガの場合は、ある時期までセックスの表現自体不可能だったのだが）、そのようなロマンチック・ラブの盲点は描かれていない。ジャンは、今まで純情マンガに求められてきたものは現実逃避のための「夢」や「理想」であり、それ以上を描く必要が無かったと言っている。オム・ヨンスは、読者は「ロマンス」を通して女性の読者が自分の生き方を計画し、男性達との関係を調整するものとして把握した。しかし、「ロマンス」を中心においた純情マンガは、女子学生に「愛している人との結婚」という理想的な未来については描かれているが、自らが選択し入り込んだ夫婦という形態に現れる家父長制の再生については描かれていないと指摘した。

しかし、今日ロマンチック・ラブという理想は、女性の性的開放と自立を求める圧力の下で崩壊する傾向にある。そしてロマンチック・ラブの崩壊は、純情マンガの中に現れるロマンスの崩壊と繋がり、「永遠の愛」といった枠を崩すと同時に長い間純情マンガの中に描かれてきた関係性の形の変化を促進させる。例えば『NANA』の中には、さまざまなタイプの男が出てきて、開かれている恋愛関係の中で選択することが可能である。しかし、小松奈々は「どれをえらんでも幸せになれるはず」なのに、「どれを選んでも幸せになれない」のだ（鈴木2003：106）。

既存の純情マンガが提示するロマンチック・ラブにおいて、主人公と結ばれる男性は、主人公にとって「特別な存在」である。例えば、それは『ベルサイユのばら』に象徴されるように、「すべてを賭けられる生涯でただ一人の人」として現れる。だからこそ、愛を成し遂げた象徴としてのセックスシーンも例外的に許される。しかし、現在日本の少女マンガ「複数の相手との自由な恋愛」という価値観のもと、かつて恋愛の最終段階であるセックスシーンは日常として描かれ、また結婚もその後が描かれている（藤本2005）。ここで、小松奈々と恋愛関係にある男性たちは、「ただ一人」の「運命の相手」ではなく、小松奈々本人が「自分で選択した人」であり、自分の選択であるが故に、その恋愛に関するリスクはすべて自己のリスクとして受け入れなくてはならなくなる。

後期近代において、「それが伝統だから」「そうなっているものだから」という既存の制度や伝統は意義を見出すことはできない。そして、後期近代の恋愛の特徴は、それが既存の制度や伝統をあてにできないがゆえに、すべて個人的なリスク計算に基づく選択の問題として現れる（鈴木2003：106－108）。

したがって現在において必要なのは、再帰的な伝統への言及による恋愛でなく、「純粋な関係」による関係となる。「純粋な関係性」は、必ずしも男女間においての関係である必要は無く、それが「永遠」であり、「唯一無二」である必要もない。つまり、「特別な人」を探すことは次第に重要でなくなり、「純粋な関係」である「特別な関係性」こそが重要になってくるのだ（ギデンス1995：95）。

ここで、二人のナナの強い絆について考えてみることができる。二人の関係は、友情と言うにはそれを越えており、だからといって男女の恋愛関係とも異なっている。

「最初、二人の関係でナナは度が過ぎるほどハチのことが好きで、執着しすぎていると思いました。最初はそれが変で理解できなかったんですけど、だんだん時が過ぎるごとに二人の関係に共感できました。男と女だけが愛するって決まってもいないし？ナナとハチは人間対人間で愛し合っているだけ。これは。もしかしたら、男女の恋愛関係より全然美しいと思った。だから、二人が互いに思い合ってる姿が愛しくて、うらやましくもあります。(jyeun07／中学生／アンケート)」

「二人の主人公の、友情というよりは'愛'に近い形態を持っているのではないかと思う。単なる男女の恋愛関係としての'愛'でなく、だからといって'友情'でもない、人間と人間を繋ぐ根本的なものとしての愛なのでは？だから、人間対人間という根本的な感情の交流の姿を、作家が意図している意図していないかは知らないが、二人の主人公の友情という素材に投影させたのではないか。(lunasugi ／20代／インタビュー)」

『NANA』は、「一人の特別な人」という既存の純情マンガが提示した男女関係を越え、また、恋愛関係という既存の関係性の「枠」をも越えているといえるだろう。読者は、常にロマンスが中心であり、ありきたりの展開を見せる純情マンガに飽きが来ていたが、ロマンスを完全に手放すことは無いにしても、現代を反映することによる予想できない展開や、恋愛関係以外の「関係性」に目を向けている『NANA』に新鮮さを感じていた。

4－2．かっこよさ＝憧れ

さて、ここで「リアルさ」を説明するため用いた『NANA』についての感想をもう一度見てみよう。

「私達の日常で起こりうることと、私達の世代が憧れているフィクションを混ぜ、それが適切にミックスされてあるから、みんながここまで熱狂するんじゃないかな？」

読者が「マンガ」を読むとき、それに何を求めているかは様々であろう。作品の中に現れる「リアルさ」は、読者が作品世界に自己投影し自己同一視しながら共感を得ることを可能にした。しかし、読者が「マンガ」の中から、そういった「有りえる、もっともらしいこと」だけではなく、フィクションの要素を求めている部分も確かにあるということを忘れてはならないだろう。

4－2－1．　自立と自由

憧れの対象として、よく用いられているのが「かっこいい」女性、大崎ナナである。大崎ナナは、恋愛体質であり「ダメさ」が目立つ小松奈々とは対照的な人物として、自分の夢に向かって進んでいく自立した女性として描かれている。男性に左右されず、恋愛に左右されず、自分の夢に向かって生きている、「自立した女性」という部分は、多くの読者の憧れの対象となっていることが伺えた。

「かっこいい女性の代名詞というか。主体性も強いし、独立心も。でも愛の前では弱くなることもあって。レンを愛しているけど、彼と一緒に東京に行かなかった場面は、本当に感動しました。(イ・ジヒョン／高校生／アンケート)」

「私は男に頼るなんて死んでもイヤ。 男に振り回される人生なんて、絶対いやです。(中略)ナナはレンを愛しているけど、レンに頼りたいんじゃなくて、レンと対等になりたいだけ。対等になるために､本当に愛しているレンを一人で行かせて、自分の夢を貫いたナナは私が言いたいことを代弁してくれているようで… (Dirty Angel ／20代／インタビュー)」

1980年代以降の韓国純情マンガの中には、既存のロマンスプロットから離れ、「女性が主体となる」物語が多く描かれ始める。そこに登場する女性は、独立心を持ち、自分の仕事を大事にしながら、夢を追求する存在として描かれ、それは既存の男性中心的である支配的イデオロギーへの抵抗として評価されていた。このような流れの上で、『NANA』に現れる女性像が格段新しいとはいえないかもしれない。しかし、既存の韓国の純情マンガの中では、そのような女性の積極性は、結局は社会が付与した女性像の中での抵抗であり、それが男性の領域を過ぎてはならなかった（ジャン1998：31、ウォン2000：32-33)。1980年代後半、韓国の純情マンガに描かれる女性達は独立心が強く積極的な女性であったが、その舞台は近未来であり、古代であり、外国であった。また、物語の中で結局は一番の危機では男性に助けられ[2]、最後には自らが男性の犠牲となり[3]、自分の夢や理想よりも愛が大切だということに気づいてしまうのだ[4]。

2　『1999年生まれ』シニルスク
3　『炎の剣』キム・ヘリン
4　『フルハウス』ウォンスヨン

もちろん、すべての読者が上記の〈Dirty Angel〉のように激しい感情を見せることは無かった。しかし、「自立した女性」である大崎ナナに感じる憧れの背景には、彼女と同じ考え方が潜んでいるのではないだろうか。それは、ある時期の韓国の純情マンガが描きたかったことであり、描くことができなかった既存の支配的イデオロギーからの脱出でもあるだろう。

このような既存の概念からの逃避への欲望は、登場人物たちの自由な生き方への憧れにも現れる。

> 「キャラクター達がとても自由に生きている感がある。何にも縛られずに生きているライフスタイルが描かれている。自分の夢に向かって、やりたいものをやっている姿がそこにある。就職をしなきゃダメだとか、恋愛の仕方とか。倫理的な部分もそう。現実ではできないことができているところが、すごくうらやましい。(キム・ジヘ／大学生／インタビュー)」
>
> 「自由奔放なライフスタイルが憧れの対象。私達は学生だし、自分が生きたい様に生きることはできない。いつも何か現実の枠のなかで生きていかなきゃダメなのに、ナナはそれに縛られず生きているように感じる。(bloody6／大学生／インタビュー)」
>
> 「ライフスタイルがかっこいい。'正しく生きる'ではなく、挑戦的でかっこよく生きる、自由奔放なところがとても良い。例えば、上京するときギターとタバコだけで十分だ！とか。(ggone／中学生／アンケート)」

先ほど、純情マンガは既存の支配的イデオロギーを反映し再生産していると言った。それにもかかわらず読者が純情マンガを消費しているのは、現代の大衆文化物の中で女性の欲望を一番反映し、彼女達の欲望を表現しているのが純情マンガであるからだろう(ウォン2000：33)。既存の純情マンガが提供する快楽は、現実とは異なった「虚構の世界」においての代理満足であり、現実逃避を図ることによる快楽であった。現在それは、現実に身をおく大崎ナナや小松奈々の行動により、支配的イデオロギーへの直接的な抵抗によって果たされる。

4－2－2．ライフスタイル

ここで、『NANA』のなかに現れるかっこいい部分について読者に質問を重ねたところ、「その生き方自体」つまり、登場人物たちの「ライフスタイル」自体かっこいいという意見が多く見られた。ライフスタイルといっても、それは極めて多様な要素を含んでいる。それは住居の規模や種類から始まり、居住地域、食事習慣、服装、家具の選び方、音楽や絵画や映画の好み、レジャーの過ごし方などまで含んでいる（石井1993：88)。

読者は大崎ナナが選んだもの、例えば自立した姿、自由な生き方自体、またブラックストーンのタバコや、ビビアンウェストウッドのファッション、パンクロックのスタイルなど、マンガの中に現れる様々な要素自体への憧れを表し、それらをひっくるめての「ライフスタイル」への憧れとなっていた。それは、小松奈々についても同様である。「好きな男を追って東京に出て」行ける自由さ、安定した仕事では無くても、好きなところでいろいろなアルバイトをしながら、「かわいい部屋に住み、かわいい服を着て、かわいいカフェでお茶をする」こと。すべては小松奈々のライフスタイルであり、読者はそんな自由ライフスタイルに憧れを抱く。

読者たちが、特に矢沢あいをもともと知らない読者が最初に目を止めるのは、実は、その内容に現れる何かではなく、作品の中のこのような細々とした要素の方が多い。『NANA』は、読者にきれいなインテリア、かわいいファッション、アクセサリーを提示し、ファッション雑誌のように情報を提供する役割も果たしている。

> 「『NANA』を通して、ビビアンウェストウッドというブランドを知り、好きになりました。パンクロックもここで知ったし。セックス・ピストルズというバンドも知りました。シド&ナンシーに纏わる興味深い事件も知って、「バンド」というのがあるということも知りました。ギターにも興味をもって今習っています。ゴスロリ？ですか？それにも興味を持ち始めたし、それ以外もいろいろ。(中略)『NANA』は、私に世界を見る目を与えてくれた、そんな作品です。(Sanso／中学生／インタビュー)」「この頃『NANA』を見ながら、ファッションとかは気を使うようになりました。一番好きな部分は服に関する部分かな。パンクとかも知らなかったけど、NANAをみながら知るようになったし。NANAが好きな理由は「私を変えたから」だといえると思います。(ハン・ボルム／中学生／アンケート)」

上記をみると「マンガ」として『NANA』を閉じた瞬間、その世界が終わるのではなく、そこに出てくる要素ひとつひとつが読者の興味を刺激し、読者の行動を促していることがわかる。それらはただ作品の中の「憧れの部分」として留まらず、読者のライフスタイルにまで影響を及ぼして

いるのだ。

ここで『NANA』に現れる様々な要素が、読者にとって憧れでありながらもそれだけに留まらないのは、それが読者に「近い」ものだからではないだろうか。例えば、読者は『NANA』の登場人物であるヤスやレンが吸っていたブラックストーンのチェリーのタバコを買うこともできるし、大崎ナナや、シン、ノブなどが持っているビビアンウェストウッドの服やアクセサリーを買うことも（高額ではあるが）不可能ではない。

『NANA』は日本で描かれたマンガであり、その背景もやはり日本である。しかし、インタビューによると、読者にとって以前ほど日本という国は遠くなく、留学や語学研修、旅行などで実際日本に行ったことのある人以外でも、行こうと思えばいつでも行くことができると国と認識していることが伺えた。実際、日本に行き、小松奈々が通っていたジャクソンホールに行ってきたファンが、ブログやコミュニティサイトに撮ってきた写真をアップロードしていることもある。つまり『NANA』に現れる「憧れ」の部分は、多くが読者が真似できる距離にあるのだ。作品の中に現れる「憧れの世界」は手が届かないようなものではなく、それは自分が実際に生活している日常より、ほんの少しだけクラスの高い空間なのだろう。そこに「リアルさ」と憧れとしての「かっこよさ」は錯綜して現れ、読者をより引き込んでいく。

おわりに

たしかに、韓国の純情マンガは韓国読者との相互関係により発達してきた。初の純情マンガ雑誌『ルネサンス』創刊以後、貸本から雑誌連載に変わることによりダイレクトに伝わる読者の声を作品に取り込むことが可能になり、ロマンチックマンガの規範であった多層的恋愛関係の構造を踏襲せず、戦争、死などの重いテーマから、複雑な人間関係、女性の生き方、そして日常的な心理など多様なテーマを描いた。そして、マンガ出版の拡大と共に、量的に拡大し質的にも発展してきたといえる。しかし、「韓国の」純情マンガが評価され、それらが研究対象となるとき、そこにはもうひとつの力が働いていたと思われる。

韓国において、マンガは、子供や学生が読んではいけない不良媒体、または、子供しか読まない幼稚なものとされ、大衆文化としてのマンガに対する否定的な認識は根強い。なぜなら、韓国におけるマンガの広がりは、日本のマンガの広がりと関わり深く、反日感情により日本マンガを読む行為が批判されると同時に、日本から多大な影響を受けているマンガという媒体自体も批判されるからである。従って、マンガという媒体が正当な評価を得るためには、日本のものとは異なっていること、つまり韓国の独自性を主張する必要があったのだ（山中2004：117－119）。

韓国の読者は、『NANA』に現れる状況や、主人公たちの感情の「リアルさ」に共感し自分を重ね、同時に現在の自分の姿とは異なる彼女たちの「かっこよさ」に憧れを抱き代理満足を感じており、日本の読者との違いはそれほど大きくない。彼女たちにとって『NANA』が「日本」の少女マンガであるかどうかはそれほど重要な意味を持たず、ただ自分が共感できる作品を求めているだけなのだ。

一時期、週刊／月刊、成人／青少年／児童向けなどと多様に別れ女性文化を築いてきた韓国の純情マンガであったが、マンガ出版の縮小に伴い、多くの雑誌が廃刊される。特に、成人向けの純情マンガ雑誌の多くは2年も持たず廃刊した。現在、韓国の純情マンガは、学校やファンタジーを背景とする児童向けのものが主流となり、10代から20代以上の読者たちを「共感」させ、「憧れ」を感じさせる作品を探すことは難しくなっている。『NANA』の受容は、このような読者たちの需要を明らかにしているのだろう。

『NANA』のファンのように、自分をファンと位置づけ、日本少女マンガを読み続けた多くの韓国の読者にとって、日本の少女マンガはすでに「日本」という国家の枠から離れ、韓国の中で消費されている「純情マンガ」の一部となっているのではないだろうか。岩渕が主張するように、大衆文化は、生産の場と消費の場において絶え間なく文化の混淆と奪用が繰り返されており、そこに起源や所有者を特定の国に見出す行為そのものがあまり意味を持たない（岩渕2001：18）。韓国読者の『NANA』の受容は、混交した現在の「純情マンガ」の様相や、ますます国境や製造国が意味をなさないであろうトランスナショナルな大衆文化の受容を示唆しているだろう。

【参考文献】

アンソニー・ギデンス(1995)『親密生の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム―』
アンソニー・ギデンス(2005)『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』ハーベスト社
伊藤守・藤田真文(1999)『テレビジョン・ポリフォニー』世界思想社
岩淵功一(2001)『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店
グレアム・ターナー(1999)『カルチュラル・スタディーズ入門―理論と英国での発展―』作品社
香山リカ・矢沢あい(2003)「『NANA』作者と精神科医の異色トーク--矢沢あい×香山リカ 少女マンガ「NANA」はなぜ女の子たちに支持されるのか」126-137『創』33(8)
鈴木謙介(2003)「どうして恋をするだけでは幸せになれないのか」100－108『ユリイカ』11青土社
藤本由香里(2005)「少女マンガに、もう純愛はない」46－51『木野評論36』
宮台真司(1993)『サブカルチャー神話解体―少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーション』PARCO出版

森直人（2005）「阿部和重X下川香苗『NANA』を読む」40－45『Quick Japan』vol.61
パク・イナ（2000）『誰がキャンディを陥れたか』サリム
山中千恵(2004)「「韓国マンガ」という戦略」『越える文化、交錯する境界』山川出版社
佐島顕子(2003)「韓国少女漫画研究： 黄美那『我らは道に迷った小鳥を見た』を中心に」『 福岡女学院大学紀要』人文学部編
オム・ヨンス（1997）修士論文「ロマンス文化を通して見た女子高校生の性の社会化に関する研究」梨花女子大学大学院
ウォン・ユンミ(2002)　修士論文「 純情マンガジャンルに現われるセクシュアリティと受容様相に 関する研究 」ソガン大学言論大学院
クァク・ソンヨン(2001)修士論文「 女性ジャンルとしての純情マンガの特性研究：受容者分析を中心に」ソガン大学大学院
ジャン・ヨンスク(1998)修士論文「 文化回路を通してみた純情マンガ：テグ地域のアマチュアマンガサークルの経験を中心に」啓明大学女性学大学院
ノ・スイン(2000)　修士論文「 韓国純情マンガと日本少女マンガの関係研究：純情漫画家の深層インタビューを通して」梨花女子大学大学院

シン・イルスク（1995）『1999年生まれ』チームマニア
キム・ヘリン（2002）『炎の剣』株式会社デウォンＣＩ
ウォン・スヨン(2002)『フルハウス』ソウル文化社
矢沢あい（2000）『ＮＡＮＡ―ナナ―』２巻　集英社
矢沢あい（2002）『ＮＡＮＡ―ナナ―』６巻　集英社

ナ・ホヲン「韓国マンガの競争力は'純情マンガにある'」
『朝鮮日報』1999.3.15
ファン・コミュニティサイト「HAPPY BERRY」
http：//cafe.daum.net/happyberryiyazawa

The Reception of Japanese Girls'Comics in Korea: A Case Study of a Japanese Comic, "NANA", and its Readers.

Jahye KIM

This paper discussed how Japanese Girls'comic "NANA", one of the most popular recently written by Yazawa Ai, was accepted in Korean context. The conclusions are as follows.Because characters' feelings and situations were expressed very 'realistically', some Korean readers of "NANA" will be able to identify themselves with main characters,Komatsu Nana and Osaki Nana. On the other hand, they could enjoy themselves through the 'cool' lifestyle of characters that is slightly different from readers'. Through reading NANA,and identified with characters, they can get surrogate satisfaction.

It is difficult to find a comic that would offer sympathetic figure to young women from teenagers to twenties in Korea,the case of "NANA" being so widely accepted is quietly unique. It might be a sign of a demand of Korean readers.

For a readers, who have been reading Japanese and Korean Girls' comics since their childhood, and considered themselves as fans of "NANA", the important thing is not the place where comics come from, but to seek the things they can sympathize with.

Nowadays, national borders between Japan and Korea are not clearly established when fans read "NANA", And also, "NANA" could be considered as hybridized media of Japanese and Korean. In conclusion,it can be noticed, the example of reception of "NANA" in Korea could be interpreted Girls' comic as transnational popular culture and hybrid media.